

〈書 評〉

石川求著

『カントと無限判断の世界』

(法政大学出版局、2018年)

佐藤 慶太

「原書の一文一文にこだわって読め、そこから見えてくるものがある」——哲学史研究に携わる者ならば、これに類する格言を一度は耳にしたことがあるのではないだろうか。そこにこの分野の存在意義もかかっているといえるのだが、哲学の古典を前にして迷わずにその言葉に従うことは必ずしも容易ではない。膨大な先行研究の蓄積、迅速な成果発表への要求、無益な議論に嵌る恐れ……阻害要因はいろいろとある。だが、冒頭の挙げた言葉が可能であることをはっきりと示してくれる著作がまれにあり、そういった著作に出会うと勇気づけられる思いがする。『カントと無限判断の世界』はそういう書物である。カントが「無限判断」について残した「一頁半にも満たないたった一つの段落」にこだわりぬき、これまで見過ごされてきた哲学史の筋とカント哲学全体を支える着想を浮かび上がらせる。文字通り、一文へのこだわりからカント解釈の新局面を開いた著作であり、哲学史研究者の面目躍如たる仕事である。

本書は、第三十一回和辻哲郎文化賞(学術部門)を受賞しており、「読み進むうちに興奮すら覚える、近年まれな哲学的達成」(選評より)であることはすでに裏づけられている¹。そこで以下では、本書のカント解釈に焦点を絞って、紹介、批評を行いたい。

まず序章で示される問題の所在と、著者の立場を確認しておこう。無限判断は、肯定判断、否定判断とともに「質的判断」を構成する第三の判断類型であり、『純粹理性批判』の「すべての純粹悟性概念を発見するための手引き」(A70ff./B95ff.)²において登場する。この部分の原版テキストでカントは、無限判断を「たんなる否定的述語による論理的肯定」と説明しつつ、例として „die Seele ist nicht sterblich“ という見かけ上否定判断と区別がつかない命題を挙げている。精読を繰り返しても三種類の判断の区別を捉えかねる、解釈上の難所である。困難を解消するために、例えばアカデミー版の編者エールトマンは、上記の命題を „die Seele ist nichtsterblich“ へと、すなわち nicht と sterblich の間を詰める改訂をして、否定判断と区別がつくようにした。その後支配的になったのはエールトマンの修正を是認する解釈であり、その代表はヘルマン・コーエン、石川文康である。著者によれば、彼らは、(①)無限判断は「形式的には肯定、内容的には否定的」というカントのオリジナルな説明を素直に受け取らずに、(②)「否定されたものの反対を積極的に措定する」という機能をそこに見出そうする(先の例文に即して言うと、無限判断は「魂は不死である」という積極的な定立である、という解釈をする)。それに対して著者は、①のオリジナルな説明はそのまま理解可能であり、「②のような憶測をそこにつけ加えるのは、無駄であるばかりか、カントの核心的思想を覆い隠してしまう点で有害でさえある」(4頁)というスタンスを

1 以下のURLを参照[2020年3月12日閲覧]。

<http://www.himejibungakukan.jp/wordpress/uploads/2019/02/gaku31.pdf>

2 カントの著作の参照箇所については、アカデミー版カント全集の巻数(ローマ数字)と頁数(アラビア数字)記す。ただし『純粹理性批判』からの引用は、A版=第一版とB版=第二版の頁数を記す。

とる。この支配的解釈との対決の構図が本書の基調をなす。

では論述を追っていこう。第一章では、無限判断を軸に西洋哲学史が辿りなおされ、コーエン由来のものとは別の無限判断の系譜が明らかにされる。これにより、カントもまたプラトン、マイモニデス、スピノザ、フィヒテ、ヘーゲルが形成する「秘められた幹線」に位置づけられうることが見えてくるが、同時に「無限判断とは？」という問への答えをくつきりと浮かび上がらせる論述が小気味よい。続いて問題の段落が読解され(第二章)、この問題に関するカントの独自性がヘーゲルとの対比で示される(第三章)。

著者が捉えたカントの無限判断の核心とは何か。まずカントが残した例文 „die Seele ist nicht sterblich“ というに即していうと、無限判断は、魂を「可死的ではないなにか」として同定する判断、さらに言うところ「可死的である」という述語を定立していないというだけでなく、そのほかの一つたりとも定立していない判断である。これは、肯定判断や否定判断のように「魂は可死的か、可死的でないか」という仕方で、特定の述語の定立に関与することがない。無限判断がいかなる述語も定立しないということは、突き詰めて言えば、主語と述語との没交渉性を示すということである。このように捉えるとき、エルトマンの修正はそもそも不要ということになる。だが、もとよりこれは表記の問題ではなく「魂の概念が肯定的に規定されることはない」という条件が満たされるならば、その判断は無限判断なのである。さらに、より踏み込んで考えていくと——これは、ヘーゲル、フィヒテ解釈を通じて明確化されるのだが——命題が否定辞を含むかどうかということも、決定的なポイントではない。もし主語 S と述語 P が完全な没交渉の関係にある場合、「S は P ではない」という命題も「S は P である」という命題も、同じく無限判断ということになる。例えば、神が端的に思考を凌駕しているとすれば、神は考えることから、考えないことから端的に隔たっているわけだから、「神は考えない」も無限判断だし、「神は考える」も無限判断である(53頁参照)。著者曰く、「主語が「なんでないか」を果てしなくそして空しく語るだけのえせ判断。これが無限判断の内容的核心である。」(112頁)。

ではカントの理論の独自性はどこに見出されるのだろうか。著者によれば、それは無限判断の所在を否定辞を含む判断に限定して、それと対応する(当の否定辞を欠いた)肯定判断との間に特別な関係が成立する、と考えた点にある。さらに著者は、カントが「どんな否定も」、無限判断が表現する「(規定に運動しない)全面否定……と、理解したいのである」、と断定する(105頁)。要するに「S は P である」という定立がなされる場合、その裏面として「P なる肯定の外には非 P あるいは超 P という膨大な、果てしのない、文字通りの空間が茫漠と広がっている」(105頁)という仕方で、肯定と否定の関係を捉えることがカントの独自性をなす、というわけである。これが「質的判断」における三分法を有名無実化するというコストを支払ってなされる断定であることは、すでに本書のベースとなる論文に関して、五十嵐涼介氏が指摘している(『日本カント研究』No.16所収の論文を参照)。だが問題は、このコストを支払って著者が何を語りたかったのか、ということである。

このことは第三章後半以降で明らかになる。すなわちカント哲学を構成する諸関係が、肯定判断と無限判断の関係(述語 P と非 P の関係)を体現していることが、明晰な議論によって裏づけられるのである。まず第三章後半では、「フェノメナとヌーメナ」(A235ff./B294ff.)に定位して、〈現象ならぬもの〉としての物自体(「ネガティブな意味でのヌーメノン」)が現象の領域を制限することによって「感性の越権」を阻む点に、無限判断の発想が生かされていることが示される。第四

章では「良心における叡智人／現象人」に関する議論を軸に、「私」が安易に「われわれ」に化して全体を覆わぬよう制限する〈自己ならぬもの〉として〈他者〉に焦点が絞られる。この〈他者〉による限界づけによって開かれるのが公的理性の空間であり、公的理性を使用するものこそが「世界市民」である。第五章では「未だ書かれていない」ネガティブな法」として、世界市民法が実定法の行き過ぎた暴力的拡張を外から制限する働きが主題化される。これらの考察および第六章のハイデガー批判、終章の光と闇の比喩を通じた論考を通じて浮かび上がってくるのは、領域の一元化を狙う思考を絶えず「制限」する「非一元的・脱一元的・超一元的な視点」に貫かれたカント哲学の姿である。「自己のよって立つ“ここ”が中心でも絶対でもないという不穏だが妥当このうえない真実」、「その真実に迫ろうとする努力が生んだ稀有な結晶」（245-6頁）こそがカントの理性批判である——これが終章を締めくくる言葉である。

以上のように、無限判断に基づいた一貫したカント哲学の読み筋が示されるわけだが、強い解釈であるがゆえに、排除される別の読解の可能性もあることも指摘できる。以下、背景に退くと考えられる論点を、三つ挙げる。

第一に、『純粹理性批判』における思考の動性という論点である。本書は現象の外部が有する「制限」の機能を際立たせるにあたり、特に「フェノメナとヌーメナ」に依拠しているが、この箇所は『純粹理性批判』の一つの段階にすぎないとする読み方もできる。当該箇所が登場する「ヌーメノン」は、「無の表」（A290ff./B346ff.）において *ens rationis* の一種として位置づけられるが、さらに *ens rationis* は弁証論の付録において、統整的理念に関係づけられる（cf. A681/B709）。本書の解釈は、『純粹理性批判』にこういったダイナミックな展開があるという読み方を背景に押しやってしまう（本書で「統整的理念」がほとんど表に出てこないのは象徴的である）。『純粹理性批判』において現象の外部はあくまでもネガティブなのか、統整的理念の存在を考慮に入れて考える余地はある。

第二の論点は、理性の誤謬の捉え方に関わる。もし理性の形而上学的な誤謬が、現象の外部のネガティブな理解によって一掃されると見るならば、それは『純粹理性批判』における誤謬論の単純化である。カントは形而上学の誤謬の源泉を、単に現象の外部のポジティブに理解することだけでなく、諸制約の完全性を求める理性の本性にも見ている。だからこそ弁証論の議論があるのだろう。「自然素質としての形而上学」の問題もこれに関係してくる。

第三に、理性の公的使用に基づく視点、あるいは同じことだが世界市民的見地のポジティブな働きをめぐる問題がある。著者は、世界市民的見地が開示する領域を徹底して「制限」を軸に解明しようとする。だがカントは、当の領域を単にネガティブに語るのではない。そこには固有の「全体性」がある。例えば世界市民的見地は、「道徳的全体」を目的とした普遍史を示したり（Ⅷ21）、人間を「動物の一つの類として」捉えたりする（Ⅷ 365）。なるほど著者も「制限」を基礎に、世界市民的見地が開示する独特の自他関係を論じているが（176頁参照）、この枠組みだけをたよりにその領域の構造を汲み尽せるのか疑問である。

以上のような指摘をした後で、ただちに「一つの強い筋を通せば、そこから零れ落ちていくものがあるのは必然」という言葉が思い浮かんでくる。上記の批判が可能なのも、そもそもカントが汲み尽くしがたい深みを有するがゆえのことだろう。ここでは何よりも、本書が新しいカントの読み方を示し、議論の発端を開いたことに感謝と敬意を表したい。

最後に、本書の各所で触れることができる、比喩を通じた明晰性に触れておきたい。これは論

点が的確に整理されているといった類のものとまったく異質のものである。私が好きなのは「良心における叡智人／現象人の区別」を「自己に先在する影」のメタファーで語る場面(173頁)。紙幅の関係上、ごそっと引用して示せないのが残念だ。哲学的なロジックを「これしかない」というイメージに変換してくっきりと描写する技には思わず嘆声が洩れてしまう。決して真似できるものではないのだが、いかなる文体でカントを語るべきか、という問題を考えさせてくれる書物でもある。